

境川 流域ガイド



この冊子では、境川流域のうち
相模原市、町田市、大和市北部にわたる
境川の上中流域を中心に取り上げています。

境川流域とは？	2
あなたの家は？	4
境川の地形的な生い立ち	6
旧石器時代から続く人々の暮らし	8
ひと昔まえの境川と人の暮らし	10
大きく変ったまちの様子	11
都市化にともなう河川改修と水質悪化	12
多自然川づくり	13
さまざまな環境と生きもの	14
魚類	16
エビ・カニ・貝類	18
水生昆虫など	19
両生類	22
爬虫類	23
野鳥	24
草花	26
春植物（コラム）	27
樹木	29
外来生物	30
行ってみよう！	32
源流域ハイキングマップ	34



境川流域とは？

境川は“境”の川？

境川は東京都と神奈川県都県境を流れています。江戸時代には境川が相模国と武蔵国の国境でした。しかしそれ以前は高座川と呼ばれ、“境”の川ではなく一つの集落の中を流れる川でした。境川の両側に相原、小山、鶴間など同じ地名が残っているのもそのためです。



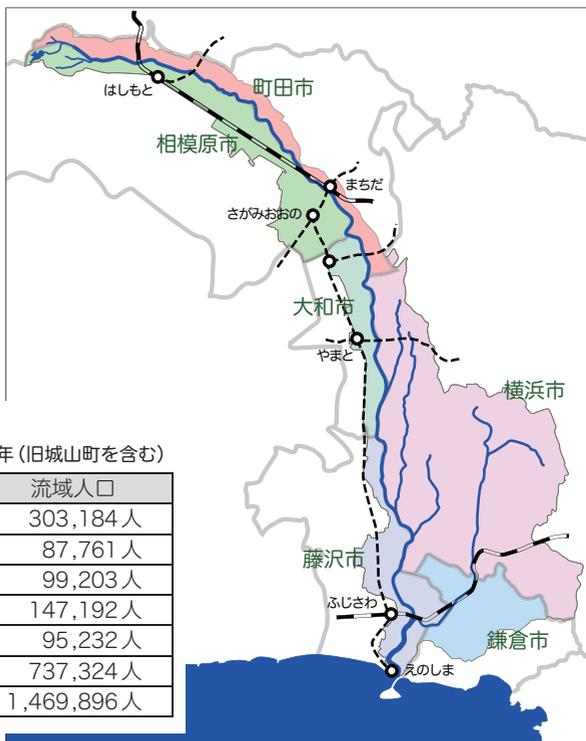
境川流域の概要 (人口は平成12年時点)

流路延長	52.14km
流域面積	210.69km ²
流域人口	147万人

流域自治体と河川管理

境川は城山湖～大戸緑地一帯を源流として、江ノ島で相模湾に注ぎ込む、全長約52km、流域面積約210km²、流域人口147万人(平成12年時点)の2級河川です。上流部では相模原市と町田市の市境を流れ、さらに大和市と町田市の市境を流れたあと、大和市・藤沢市と横浜市の市境を流下し、藤沢市内を南流して相模湾に注ぎ込んでいます。流域の自治体は鎌倉市を加えた6市で、河川管理は神奈川県と東京都に

よって行なわれています。



各市の流域面積と流域人口

人口は平成12年(旧城山町を含む)

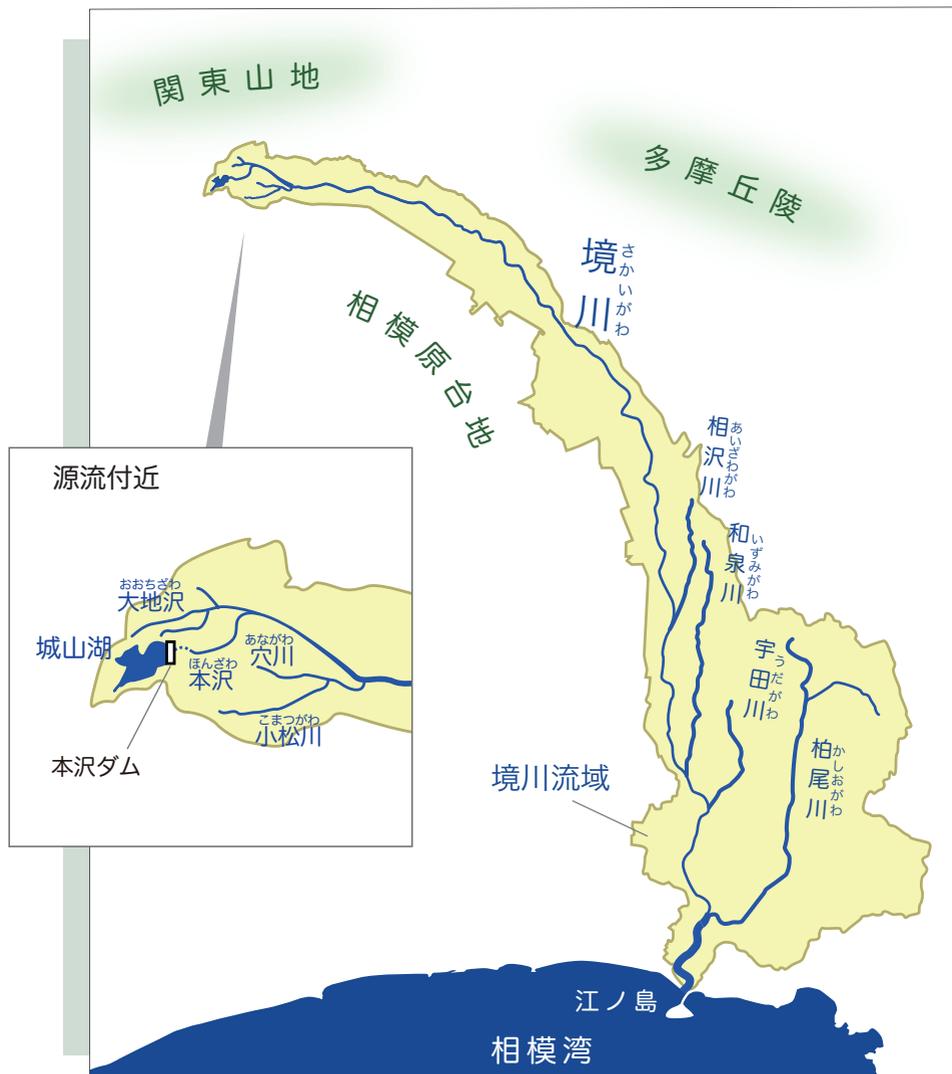
市名	流域面積	流域人口
相模原市	32.09km ²	303,184人
町田市	18.74km ²	87,761人
大和市	13.03km ²	99,203人
藤沢市	22.26km ²	147,192人
鎌倉市	20.77km ²	95,232人
横浜市	103.80km ²	737,324人
合計	210.6km ²	1,469,896人

流域とは

空から降った雨は低いほうへ、低いほうへと流れます。尾根筋を分水嶺として、降った雨が川に集まる範囲を「集水域」あるいは「流域」といいます。

境川は関東山地が平地に接する相模原市城山・町田市相原を水源として、相模原台

地と多摩丘陵の間を支流の流れを集めながら流下します。境川流域は上流部はとても細長く下流部が大きく膨らんでいて、オタマジャクシやタツノオトシゴを逆さにしたような形をしています。



あなたの家は？



各市での境川流域の占める割合

人口は平成12年(旧城山町を含む)

市名	市域全面積	流域面積	流域%	市域全人口	流域人口	流域%
相模原市	328.84km ²	32.09km ²	9.8%	673,302人	303,184人	45.0%
町田市	71.63km ²	18.74km ²	26.2%	370,155人	87,761人	23.7%
大和市	27.06km ²	13.03km ²	48.2%	212,761人	99,203人	46.6%



境川流域の上中流部を拡大しました。この流域図の中にあなたの家がありますか。もしあなたの家があれば、あなたの家に降った雨は境川に流れ込んでいます。相模原市と大和市ではおよそ2人に1人が、町田市では4人に1人が境川流域に暮らしています。



境川の地形的な生い立ち

境川は相模川の子ども

その昔、およそ50万年前ごろ、相模川は^{こてんどうげ}御殿峠を通り多摩丘陵を横切って東京湾に流れ込んでいました。その後、相模川は相模湾に流れ込むようになりましたが、洪水のたびごとに流路を変え、約1万年前以降はほぼ現在の位置を流れるようになりました。

相模川はある時期には、今の境川あたりを流れていたと考えられます。そして相模川が去ったあと、かつて相模川が流れてい

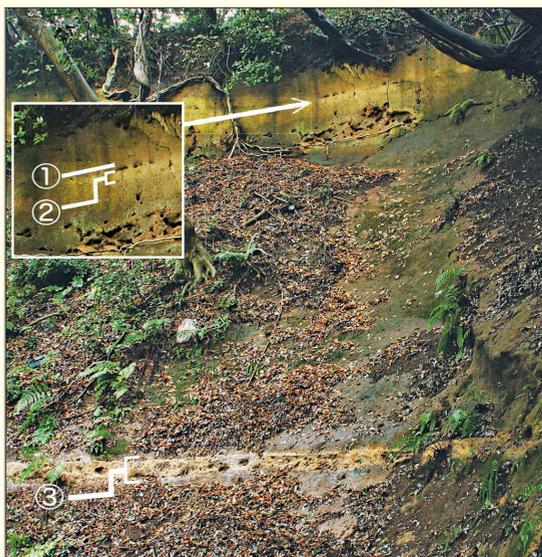
た流路に多摩丘陵や相模原台地から流れ出す水が集まり、境川となったのです。つまり境川は昔の相模川のを受け継いで流れる、相模川の子どものような川です。

境川には境川の水量では運ぶことができないような大きな石が転がっています。これらの石には丹沢山地の岩石も含まれていて、昔、相模川が運んだ石であることが分かります。

境川の段丘崖

相模原には富士や箱根から火山灰が降り続けました。降り続ける火山灰を境川が海に運び流したため、火山灰が厚く積もった台地と境川の間には、20m近い崖ができました。相模原市古淵ではこの火山灰の崖を見ることが出来ます。

この崖は箱根や富士山から飛んできた火山灰や軽石、スコリア（玄武岩質の溶岩の破片）が約10万年かけてたまってできたもので、中には遠く九州から飛んできた火山灰も含まれています。これらの中で特徴的なものは、富士相模野第一スコリア、始良^{あいら}Tn火山灰、箱根東京軽石です。富士相模野第一スコリアは約2万5千年前に富士山から飛んできたスコリアです。始良Tn火山灰は、現在の鹿児島島の錦江湾付近にあった火山が約2万9千年前に巨大噴火をしたときの火山灰が風に乗って運ばれてきたものです。箱根東京軽石は今から約6万6千



- ①富士相模野第一スコリア層
- ②始良 Tn 火山灰層
- ③箱根東京軽石層

古淵の^{るとう}露頭

年前に箱根が大噴火したときの軽石と火山灰からなる地層です。

源流部に見られる小仏層群

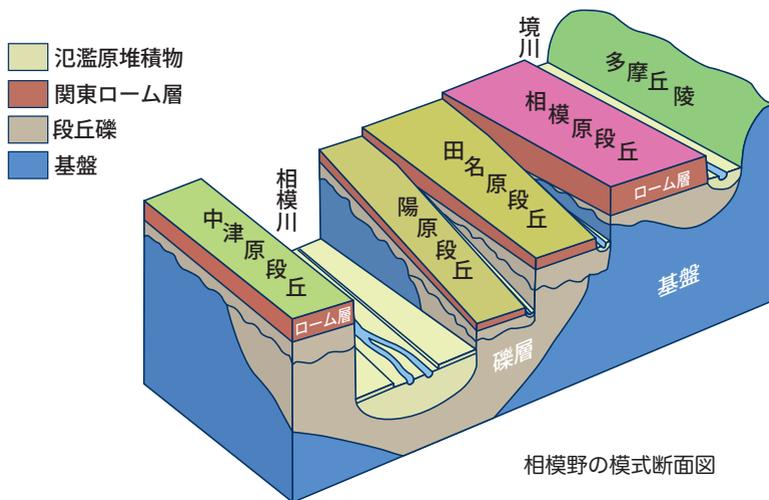
境川源流部の大地沢青少年センターや城山湖周辺では、小仏層群と呼ばれる基盤の岩石が露出しています。小仏層群は約1億年前に海溝で堆積したできた泥岩・砂岩・礫岩からなる地層です。これらの地層はプレート運動によって陸地側に押し付けられて、さらにそれが隆起してできたものです。

このように境川およびその周辺の地層や地形には、約1億年におよぶ大地の歴史が残されているのです。



小仏層

相模川は流路を変えながら時には土地を削り、時には土砂を堆積したりしました。これと同時に、気候の激しい変動によって、相模湾の海水面が上昇や低下を繰り返したり、土地が隆起したりして、相模原段丘、中津原段丘、田名原段丘、陽原段丘が次々と形成されていきました。



相模野の模式断面図

旧石器時代から続く人々の暮らし



境川沿いの主要遺跡分布図

遺跡の分布

境川のほとりで人々が生活を始めたのは今からおよそ3万年前の旧石器時代にさかのぼります。遺跡は川に沿った台地上のへりに多く立地しており、人々は狩りや木の実の採集をしながら川沿いを移動して生活していました。

人々が川辺に定着的な集落をつくって生活するようになるのは縄文時代からです。およそ5千年前には境川の両岸に大きな集落がつくられました。集落跡からは煮炊きに使われた多量の土器や木の实などをすり潰す石皿や磨石などの石器がたくさん出土します。おそらく木の实などのアク抜きに境川の水が使われたのでしょう。

弥生時代になると、多摩丘陵の尾根上では集落や溝で区画された大型の墓が営まれます。この時期、丘陵内の谷戸を開発し小

規模な水田が営まれていた可能性も考えられます。

古墳時代の境川流域は塚状の古墳が少ない一方、丘陵や段丘の斜面に横穴墓が多く造られます。多摩丘陵上に大規模な集落も現れ流域の開発が進んでいったことを示しています。

古墳時代の終末には多摩丘陵に須恵器と呼ばれる容器を焼いた窯が築かれるようになります。斜面を利用した窯で、その後、奈良～平安時代を通じ操業が続けられました。多摩丘陵の豊かな森林資源や谷戸を流れる水が、窯の操業にとって欠かせないものだったのでしょう。

主要遺跡紹介



橋本遺跡

境川右岸の相模原市元橋本に位置し、旧石器時代から中近世に至る複合遺跡です。奈良～平安時代の集落跡からは須恵器が多く出土しており、これらの多くは境川の対岸に位置する南多摩古窯群で焼かれたものです。

橋本遺跡から
出土した須恵器

かんじょうつみいしこう 田端環状積石遺構

境川左岸の町田市小山町に位置する東京都の指定史跡です。縄文時代後期～晩期の環状積石遺構(ストーンサークル状の配石)が発見されました。現在は埋め戻され、復元された遺構が野外で展示されています。



遺構の野外展示



忠生遺跡 A 地区で見つかった環状集落の一部
(『発掘された町田の遺跡』町田市教育委員会より転載)

忠生遺跡 A 地区

町田市木曽町に位置し、縄文時代中期の大規模な環状集落跡が発見されています。境川流域の拠点集落にふさわしく、多量の土器や石器のほかに、大珠^{たいしゆ}と呼ばれる玉製品や長さ180cmを超える超大型の石棒などが出土しています。

どうしょうやま 道正山横穴墓

相模原市上鶴間にある古墳時代の横穴墓。境川右岸の崖線上に位置し、伐採作業中に発見されました。内部は後世に手を加えられ、当時の形態を完全には留めていませんでしたが、7世紀後半以降に構築されたものとみられます。

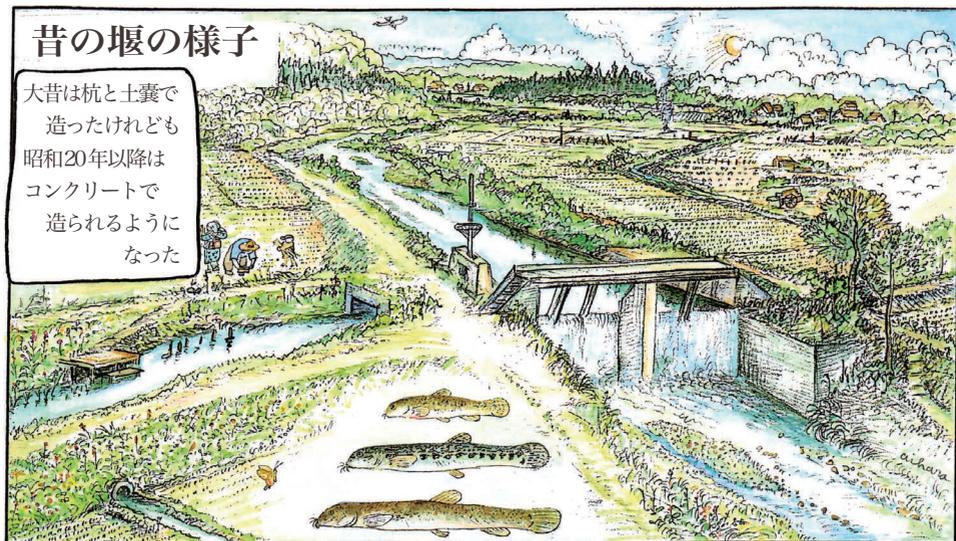
横穴墓の内部



ひと昔まえの境川と人の暮らし

昔の堰の様子

大昔は杭と土囊で
造ったけれども
昭和20年以降は
コンクリートで
造られるように
なった



境川はクネクネと蛇行した川で、大雨が降ればすぐにあふれる“暴れ川”でした。しかし日照りや雨の少ない冬場には、ほとんど水が流れないこともありました。

時に田畑が水につかることはあるものの、川沿いの湿った重い土では、米麦や里芋、大豆などの農作物がよくとれました。また堰で水をためて水田に水を引き、水車を回して糸をより、米つきや製粉もしました。川の水で野菜や農具、養蚕の道具などを洗うこともありました。

昔から境川にはたくさんの橋がかかっていました。町田の人が相模原の畑に通い、相模原の人が町田の山で薪を切るなど、人々の往来が多かったためです。橋のなかには2本の丸太を並べただけのものもあり、管理は兩岸の集落や近所の人が行いました。また水の少ない冬場に川底の砂利を運び上げ、道に敷いて道普請みちぶしんをしました。

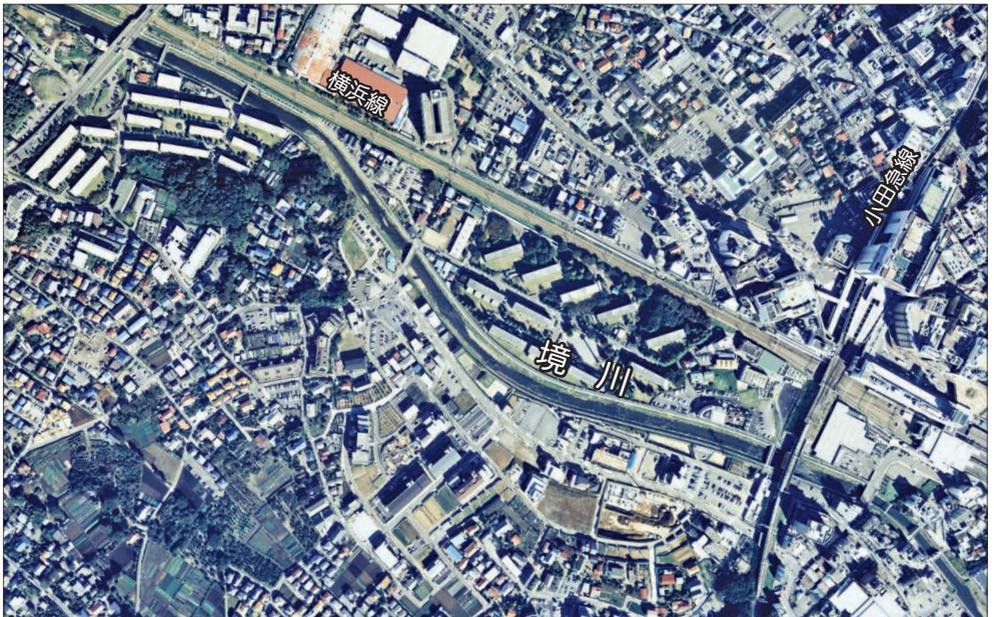
そのころ境川ではコイ、フナ、ハヤ、ウグイにドジョウやナマズ、海からやってくるウナギやモクズガニもとれました。子供たちは色々な仕掛けを作ったり、川の一部をせき止めたりして、魚取りを楽しみました。また夏には堰や深い淵で泳ぎ、冬には凍った川でスケートをしたといます。



大きく変わったまちの様子



1942年（昭和17年）陸軍撮影空中写真



1996年（平成8年）神奈川県撮影

都市化にともなう河川改修と水質悪化



上鶴間付近 (1966年6月)

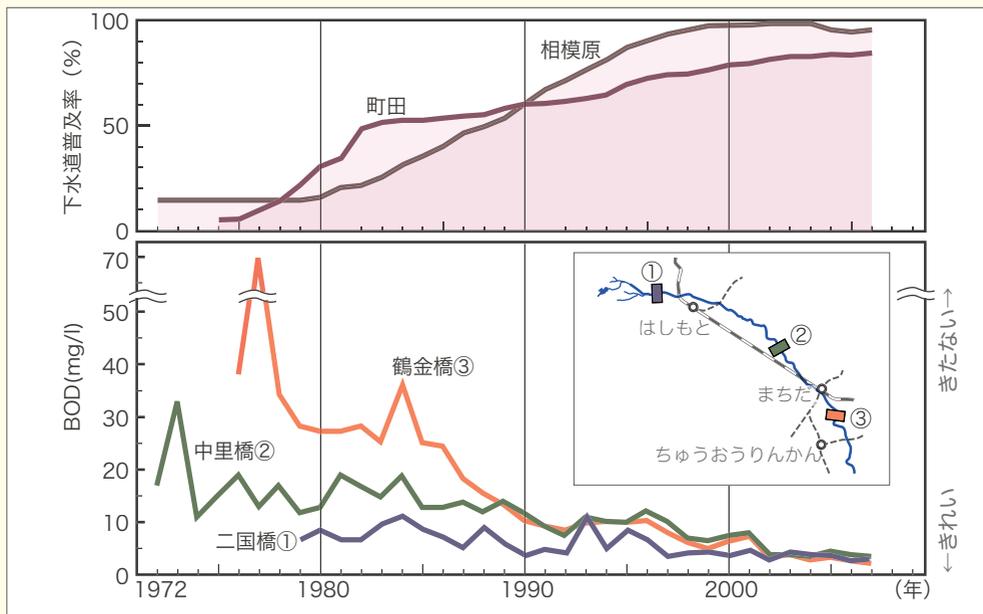


東淵野辺の境橋 (1972年)

1960年代に入ると川沿いに住宅や団地が建ち、たくさんの方が住むようになり、洪水の被害も深刻になりました。そのため1970年代(昭和40年代中頃)から河川改修が始まりました。川を真っ直ぐにして川幅を広げ、川岸をコンクリートで固めて、降った雨を少しでも早く海に流す工事が行われました。そのため川の自然は失われました

が、水害は減りました。

また米軍施設や工場、住宅から流れ出す雑排水で1960年代以降、川の水はとても汚れ、一時は生き物の住めない“死んだ川”になりました。しかしその後、公害対策や公共下水道の整備が進み、最近では水質も改善されて魚や水鳥たちの姿も見られるようになりました。



水質変化の様子

多自然川づくり

1990年代に入って、川づくりは大きく変りはじめ、治水目的だけの河川改修から、自然環境や川の風景を大切にする川づくりが始まりました。境川でも1995年(平成7年)から橋本地区で多自然川づくりが行なわれ、これまでの直線コンクリート護岸の川とは違った風景が見られます。

なかでも横町橋付近の工事では、神奈川県と市民が専門家を交えて設計段階から話し合い、大きな蛇行や河畔林、土の岸を残した川づくりが実現しました。今、橋本地区では境川が小学校の総合学習の場として活用され、残された河畔林ではレッドデータ植物が保護され、土の岸ではカワセミが子育てをしています。



橋本地区の境川風景



横町橋付近の蛇行と河畔林

さまざまな環境と生きもの

源流の沢

沢にはきれいな冷たい水が流れ、石がゴロゴロしています。冷たい水を好む生き物や、山地の植物が見られます。



ヨゴレネコノメ



ヤマルリソウ



カジカ



ムカシトンボ



タゴガエル

源流の谷戸

山間の谷底を小川が流れる谷戸の水田や池では、ゆるい流れや水たまり、湿地を好む動植物が見られます。



キイトンボ



ホトケドジョウ



ミズニラ



イチヨウウキゴケ



イモリ

まちの中の川

まちの川はコンクリートで改修されています。最近では水質も改善され、川や川原で様々な動植物が見られます。



クサヨシ



ツルヨシ



ハグロトンボ



ナマズ

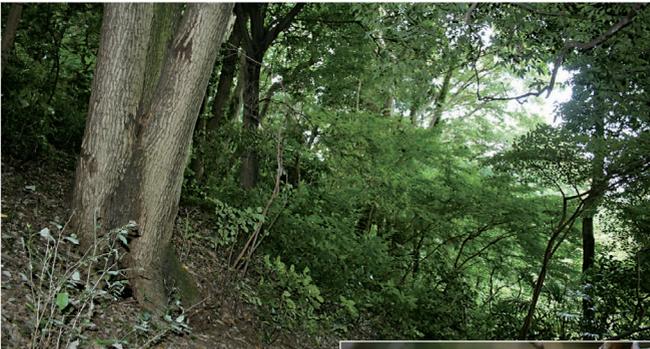


オナガガモ

かはんりん

河畔林・斜面林

川辺の林や段丘崖の斜面林では、山地性の植物や湿った場所を好む植物が見られ、林の生き物が見られます。



ヤマブキソウ



ソバナ



オナガアゲハ



コゲラ



ニリンソウ

魚類

コイ



境川では本流に多く生息する。過去、盛んに放流された。春から初夏にかけて産卵する。雑食性で、他の水生生物を食べてしまうため、生物相の単純化が問題視される。

オイカワ



境川では本流に多い。体長15cm程度に成長する。産卵期は春から夏で、この時期になると雄は体側に水色やピンクの婚姻色が現れる。シラハエとも呼ばれ釣りの対象となる。

モツゴ



8cm程度の小型の魚で、クチボソとも呼ばれ、湖沼や河川下流域に生息するポピュラーな種。春～夏が繁殖期で水草などに産卵する。

ギンブナ



境川では本流に生息する。マブナとも呼ばれ、春に産卵する。フナ類の中で最もよく見られるポピュラーな種。雌性発生し、ほとんどが雌で雄はめったに見られない。

アブラハヤ



境川では上流や支川に多い在来種。体側は黒色の縦帯があり15cm程度に成長する。鱗が細かく、触るとヌルヌルしている。神奈川県と東京都のレッドデータ種。

タモロコ



10cm程度に成長する。モツゴに似るが、口ひげが一对あること、尾ビレの付け根に黒斑があることから区別できる。河川の中下流域や細流に生息する。本来は西日本の魚。

ドジョウ



水田や湿地、細流に生息する。食用として養殖がおこなわれているが、水田の減少とともにない、自然の生息環境は減少している。口ひげは上アゴ3対下アゴ2対。

シマドジョウ



河川中流域の砂底に生息する。大きな個体は14cmほどになる。口ひげは上アゴ2対下アゴ1対。境川では上流や支川に生息する。神奈川県と東京都のレッドデータ種。

ホトケドジョウ



境川では上流や支川に生息する。水温が低く流れのゆるやかな河川や農業用水路にみられる。口ひげは上アゴ2対下アゴ2対。国と神奈川県、東京都のレッドデータ種。

ナマズ



夜行性。中流に生息し、繁殖期には水田や河川のワンド岸際などの浅場で産卵する。河川の護岸や水田の減少により産卵場所が減少している。東京都のレッドデータ種。

カジカ(大卵型)



渓流などの上流域で河床が石礫の川底に生息する。境川では源流域の狭い範囲だけに生息が限定される。国と神奈川県、東京都のレッドデータ種。

トウヨシノボリ



ハゼ科の底生魚。左右の腹ビレが癒合し吸盤状になる。それを利用し流れの速いところでは流されないように石などに張り付く。主に河床が石の所に生息する。境川の確認例は少ない。

エビ・カニ・貝類

カワナナ



橋本から上流や支川に多い。汚濁の進んだ水域にはみられない種で、ゲンジボタルの餌として有名。他地域の個体が放流され、地域の固有性が失われてしまうことが心配されている。

サカマキガイ



北米原産の外来種で、1cmに満たない小型の巻貝。モノアラガイ類とは巻きの向きが逆の左巻きであり判別が容易。ヘイケボタルの餌に利用できる。境川ではモノアラガイよりも多い。

ヌカエビ



ヌカエビの亜種であるが、幼生が海に降りるヌカエビと違い淡水域で繁殖できる。池や流れの緩やかな河川の水草などが繁茂する水域に生息し、境川でも緩やかな流れの環境で見られる。

モノアラガイ



1cm程度の在来巻貝で殻は薄く壊れやすい。サカマキガイやハブタエモノアラガイなどの外来種の生息拡大により減少が心配されている。国のレッドデータ種。

サワガニ



河川の上中流域に多く見られるが、湧水のある箇所では下流域でも生息する。境川では源流域や支川に多い。寄生虫(肺臓ジストマ)を運ぶカニの仲間。生食は危険。

スジエビ



3～5cm程度のエビ。多くのエビカニ類が繁殖に塩分を必要とするが、ヌカエビ同様淡水域で繁殖できる。水草のあるところや、植物が水につかった水辺にみられる。

水生昆虫など

シロタニガワカゲロウ



幼虫は平たい体をしていて、流れの早い瀬の石の表面に張り付いたまま移動するのに適している。石の表面に付いた藻類などを餌としている。河川の中流域に多く見られる。

コバントビゲラ



幼虫は落葉を小判型にくりぬき2枚重ねた巣を作るトビケラ。広葉樹が水面上に張り出し、落葉が水中に堆積する流れの無い所に生息。生息場ではくりぬかれた後の落葉も見られる。

ヒラタドロマシ



水生甲虫。幼虫は扁平な円盤型をしていて石に張り付いて生活し、石の上の藻類や堆積物を餌としている。裏返すと中央に6本の足が確認でき昆虫であることがわかる。

ガガンボ



漢字で大蚊と書くガガンボ。蚊を大きくして6本の足を伸ばしたような成虫であるが、幼虫は2～5cm程の脚の無いウジ虫のような形で、多くは河川の砂礫底（きれいでい）に潜って生活している。

シマイシビル



河床の石に付着して生活している。ヒルの一種であるが、水生昆虫やイトミミズなどを餌とし、吸血しないので触れても心配ない。河川に広く分布し、境川でもよく確認される。

オオヤマカワゲラ



幼虫は3cm程の大型のカワゲラ幼虫。水のきれいな河川上流の流れの速い所に生息する。成虫まで2～3年かかり、成虫は春にみられる。境川では上流の支川に生息する。

ヘビトンボ



幼虫は流れのある所の石の間に生息し、境川では上流や支川に多い。肉食でアゴが発達し、かみつく力が強い。古くから孫太郎虫と呼ばれ、疳の虫のクスリとされた。

ミズカマキリ



水田や沼など、流れが無く水草や植物のある水域に生息する。お尻から伸びる管を水面上に出して呼吸する。鎌状の前肢で獲物を捕らえ口吻を刺し、消化液を送り込み溶けた肉液を吸う。

オナガサナエ



境川では上中流域に生息する。成虫は6月頃から現れる。腹部の先端に膨らみがあり、その先の付属器が細長いためこの名がある。トンボには珍しくヤゴが早瀬に生息する。

コオニヤンマ



ヤゴは平べったい体形をしていて、流れの緩い石の下や溪流の落ち葉だまりに生息する。成虫は身体ががっちりしており、後肢がとても長いのが特徴。境川の広い範囲に生息する。

ハグロトンボ



夏に羽化する黒い翅を持つトンボ。河川の上中流域に生息する。羽化後未成熟のうちは林内に生息し、成熟すると川に戻ってくる。境川では河川の水質良化とともに生息域を広げている。

カワトンボ



河川の上流域に住む流水性のトンボ。4月末頃から羽化し、真夏になる前まで成虫が見られる。境川では源流域に多く生息する。オレンジ色の翅の個体と透明な翅の個体とがいる。

ムカシトンボ



ヤゴは境川源流域の沢に生息する。幼虫の期間は7年位と言われている。羽化するときには水辺を離れて長い距離を歩くため、流れから離れたところで羽化殻が見つかることがある。

オニヤンマ



ヤゴは境川源流域の細流の砂泥底に潜って生活する。幼虫期間は2年以上と言われている。成虫は7月から10月頃まで見られ、細流を何度も行き来して、なわばりをパトロールする。

クロスジギンヤンマ



ギンヤンマに似た緑色の胸部の側面に、はっきりした黒い筋がある。ヤゴは薄暗い池に生息する。成虫は5月初めから7月頃まで見られる。境川では源流域のため池などに生息している。

シオカラトンボ



池や水田を好み市街地にも多く、境川沿いで最も普通に生息する。メスは体が麦わら色をしているためムギワラトンボと呼ばれている。オスは成熟すると白粉を帯びてシオカラ色となる。

ウスバキトンボ



本来は熱帯地方のトンボで、春に海を渡ってやってくる。成長が早く数回の世代交代を繰り返しながら北上する。境川沿いでは夏頃に成虫が見られるが、ヤゴは越冬できずに死滅する。

アキアカネ



ヤゴは主に水田に住み、初夏に羽化した後、標高の高い所へ移動する。秋に水田へ戻り産卵し、卵のまま越冬して翌春孵化する。卵は乾燥に強いいため、水を落とした水田でも越冬できる。

両生類

タゴガエル



境川では源流域に生息する。春に沢沿いの水のしたたり落ちるところに産卵し、オタマジャクシは卵の栄養だけで成長して上陸する。ヤマアカガエルと形態がよく似ている。

ニホンアマガエル



足に吸盤を持ち、上陸後は樹上や草の上で生活する。水田に水入れをする季節以降でも繁殖が可能のため、農閑期に水を落とす水田でも生息ができる。境川全域で生息している。

アズマヒキガエル



3月頃、水たまりやため池に紐状の卵塊を産む。オタマジャクシは黒く小さい。上陸後は水場を離れ林内で小動物を捕食する。境川では源流の一部や民家の庭にある池などで繁殖する。

ヤマアカガエル



1月～3月に水たまりに産卵する。初夏までに上陸し、その後水場を離れ林内で小動物を捕食する。境川沿いでは安定した止水域しずいきが少ないため、上陸前に干上がって死滅する個体が多い。

シュレーゲルアオガエル



田んぼやため池などの土の中に泡状の卵を産む。上陸後は水場を離れ、林内で小動物を捕食する。境川沿いでは源流域に少数が生息する。蛙がコンクリートの水田では繁殖できない。

ニホンイモリ



腹部が赤色をしているためアカハライモリとも呼ばれる。長い尾を持つ。境川沿いでは源流域の1ヶ所ではしか生息が確認されていない。神奈川県のレッドデータ種。

は 爬虫類

シマヘビ



胴体に4本の黒い筋を持つことからその名がある。境川沿いでは最も普通に見られる大型のヘビである。カエルやカナヘビなど小動物を捕食する。毒はないが攻撃的。

アオダイショウ



ネズミや鳥を捕食する大型のヘビ。木登りを得意とする。境川沿いでは数ヶ所で普通に生息するが、源流域では個体数が少ない。

ヤマカガシ



水辺に住み、主にカエルやオタマジャクシを捕食する。奥歯に強い毒を持ち、咬まれると全身で内出血する。境川では普通に生息しているものと思われる。

ヒバカリ



「咬まれれば命はその白ばかり」と言われその名があるが、無毒の温和な性格の小型のヘビ。境川源流域に生息し、カエルやミミズなどを食べる。神奈川県レッドデータ種。

ニホンカナヘビ



体長の2/3を占める長い尾と、ガサガサしたウロコが特徴のトカゲの仲間。主に昆虫やクモを食べる。境川沿いの全域に生息している。

ニホントカゲ



滑らかなウロコが特徴。成体は全体が茶褐色だが、幼体は黒い体に5本の黄色い線が入り、尾はコバルトブルーをしている。敵に襲われると尾を自切して逃げる。境川全域に生息。

野鳥

カルガモ



境川周辺で繁殖する唯一のカモ類。春から夏にかけて十数羽の雛が産まれるが、捕食されて次第に個体数が減る。川の護岸が急峻のため、大水で命を落とす個体もいるものと思われる。

コガモ



9月頃渡来して越冬し、5月頃まで日本にいる。渡来当初は外見上オスとメスの区別が付きにくいですが、オスは間もなく換羽し、華やかな色彩になる。境川では年々渡来数が減少している。

コサギ



やや小型の白いサギ類。脚は黒いが脚指が黄色い。うまく脚を使って魚を追い出し、長い嘴で捕らえる。繁殖期には後頭に長い冠羽が、胸と背にはレースのような飾り羽があり目立つ。

アオサギ



グレー色をした日本最大のサギ類。樹林地に集団で営巣するが、境川沿いに営巣地はない。川沿いの針葉樹などで休息しながら、時折川に降りて魚などの水生生物を捕食する。

キセキレイ



スマートな体型をした腹部が黄色いセキレイ類。常に尾羽を上下に振りながら川原を歩き、水生昆虫類や飛んでいる昆虫を捕らえて食べる。境川全域で繁殖している。

セグロセキレイ



白黒のツートンカラーをしたセキレイ類。世界中で日本にしか生息していない。境川沿いで繁殖しているが、年々個体数が減少し、かつ生息域が狭まっている。

カワセミ



頭部と背中がコバルトブルー、腹部がオレンジ色、長い嘴くちばしを持つ大変目立つ鳥。川面を低く飛翔し、川沿いの植物などに止まり川の中にダイブして魚を捕る。境川で繁殖している。

アオバズク



5月の青葉の頃南方より渡来する。夜行性で、主に昆虫を捕食する中型のフクロウ類。生息には、営巣に十分な大きさの樹洞しゅどうを持つ大木が必要。境川沿いで繁殖。神奈川県のレッドデータ種。

オオタカ



林内を俊敏に飛翔して他の鳥を捕食する猛禽類。境川近隣の森で繁殖していて、餌場として境川を利用する。川沿いに住むドバトが重要な餌になっている。国と神奈川県のレッドデータ種。

カワラヒワ



太い嘴を上手にを使って草や木の種子を食べる。繁殖期以外では群れで行動し、飛翔中黄色い羽が目立つ。「キリキリッ、コロコロッ」と鳴く。境川沿いで繁殖している。

アオゲラ



背中が黄緑色をした中型のキツツキ類。境川沿いでは主に屋敷林・斜面林の大木・古木などで営巣する。木に穴をあけ中にある虫を食べる。オスは後頭部の赤い羽が目立つ。

モズ



藪の中に巣を作り、畑や原っぱで虫を採食する。秋から冬にかけてオスとメスは独立のなわばりを持つが、繁殖期には解消してつがいで行動する。境川沿いで繁殖する。

草花

ユリワサビ



2月下旬から白い花を咲かせ境川に春の訪れを告げる。源流部の沢沿いや本流部の湿った林床に見られる。ワサビの仲間でも香りを持つが、食用にはしない。茎はほうように伸びる。

ヤマネコノメソウ



河畔林の湿った林床に群生する。花は黄緑色。茶色に熟した種子が猫の目のように見える。源流部では本種は見られず、代わってネコノメソウ・ヨゴレネコノメが見られる。

ニリンソウ



境川を代表する春植物。源流部の沢や本流部の湿った林床に群生する。多少暗い林内でも咲くが、乾燥には弱い。花が2個つくためこの名があるが、1個あるいは3個咲くこともある。

アズマイチゲ



河畔林の林床や林縁、川沿いの土手に生える。早い場所では2月初めから白い花を咲かせ、4月中旬には葉が枯れ始める典型的な春植物。神奈川県レッドデータ種。

ヤマエンゴサク



本流部の河畔林の林床や林縁に生える。花は淡紫色。苞にギザギザがありジロボウエンゴサクと区別がつく。葉は線形、円形など多様。相次ぐ川沿いの開発により生育地が激減した。

イチリンソウ



ニリンソウに似るがひと回り大きい一輪の花を咲かせ、葉には深い切れ込みがある。日当たりのいい場所を好み、やや乾燥した斜面上部でもよく咲く。盗掘により数が減った緑地もある。

レンプクソウ



比較的めずらしい植物だが、境川の本流部ではまとまった群生が見られる。葉の色とよく似た黄緑色の球状の花は、小さな5個の花が集まったものでゴリンバナとも呼ばれる。

タカオスミレ



高尾山で最初に発見されてこの名前がつく。ヒカゲスミレの一品種で、葉の表面が紫褐色を帯びる。本流部の湿った林縁で良く見られるが、なぜか高尾山に近い源流部では見られない。

春植物

早春、上層の樹木がまだ葉を展開する前に生長し、林床で花を咲かせる草本を春植物と呼んでいる。ユリ科のカタクリ、アマナ、キンポウゲ科のイチリンソウ、ニリンソウ、アズマイチゲ、ケシ科のヤマエンゴサクなどがこれにあたる。生育期間はごく短く、他の植物が旺盛に生育し始める初夏には、茎や葉は枯れて地上から姿を消すという、特異な生活様式をもっている。

春植物は最初、北米東部やヨーロッパの落葉広葉樹林で注目された。これらの地域では林床にササがないため、春植物が大面積にわたって咲き乱れ、美しいお花畑を作る。日本では雪国の冷温帯落葉広葉樹林を本拠地とするが、太平洋側の雑木林の林床にも現れる。雪が消えたばかりの日本海側の落葉樹林や冬枯れの雑木林の下で、他の植物に先駆けて美しい花をつけるため、ファンが多く、春植物を求めて全国を旅す

小泉武栄(東京学芸大学教授)

る人も少なくない。

特異な生活様式は、林床の丈の低い植物が春先や雪解け直後にしかあたらぬ日光を利用するために、編み出したものであろう。上層の葉が展開する前の限られた日光を利用するために、早春のまだ肌寒い時期に、寒さに耐えて生育を始めるよう進化したものに違いない。

本来雪国を本拠地とする春植物が境川沿いで見られるのは、境川の段丘崖が北向きで、湿潤な崖の下部が夏でも涼しく保たれているためである。御嶽^{おんたけ}起源の火山灰が崖を湿潤に保つ上で大きな役割をしている。

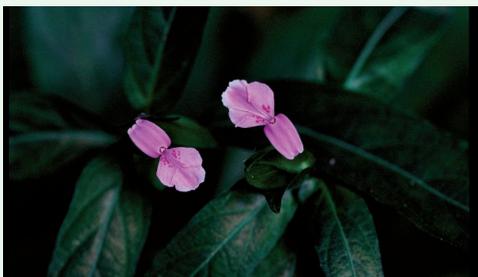
春植物は氷期に南下したものの生き残り、つまり「生きた化石」である。涼しいことが球根や根系の呼吸による消耗を抑制し、それが個体の存続につながっているのだろうと考えられている。

オドリコソウ



日当たりのいい林縁や河川通路沿いに群生する。春植物が姿を消す初夏に花の盛りを迎える。花の形が笠をかぶった踊り子を思わせこの名がついた。花の色は白と薄紅色の二つがある。

ハグロソウ



古淵から下鶴間にかけての河畔林で見られる。葉が暗緑色をしているためにこの名がある。夏に淡紅色の小さな花をつける。古淵市民緑地では林の手入れによって急速に数が増えた。

ミゾソバ



源流部の沢や休耕田、本流の水辺でよく見られる。葉が牛の顔に似ているためウシノヒタイの別名もある。茎にトゲがある。夏から秋にかけて薄紅色と白色の小さな花が集まって咲く。

ハナウド



初夏の境川を代表する植物。川の土手や林縁、明るい林内にも生える。冬から葉を出し草丈は2m程まで伸び、初夏に白い花をつける。蝶や小さな甲虫など様々な昆虫が吸蜜に訪れる。

コウモリカズラ



つる植物。五角形の葉をコウモリに見立てた。林内や林縁に生え、林床をはったり、他の植物にからみつく。古淵から森野・鶴野森にかけてよく見られる。東京都のレッドデータ種。

ヤマブキソウ



4月下旬に黄色の花を咲かせる。ヤマブキに似るが花弁は4枚。近年減少が著しく、生育地には私有地が多いため、さらなる減少も心配される。神奈川県、東京都のレッドデータ種。

樹木

ケヤキ



落葉高木。相模原市・町田市の“市の木”。公園や街路樹によく植えられるが、本来は川沿いに生える樹木。花は春咲き、果実は枯葉の付いた小枝がプロペラとなって遠くまで運ばれる。

エノキ



川沿いに見られる落葉高木。昔は一里塚として街道に植えられた。果実は赤褐色に熟し多くの野鳥が好む。葉は左右非対象で葉脈に特徴がある。オオムラサキやゴマダラチョウの食樹。

オニグルミ



川原や川沿いにみられる落葉高木。果実は秋に熟す。林にすむアカネズミの大好物。食用になり、木曾の遺跡からはクルミ形土器も出土した。冬芽と葉痕は羊の顔を連想させる。

タチヤナギ



境川の水辺を代表する樹木。春に黄緑色の花を咲かせ、種子は白い綿毛で風に舞う。水際に並ぶように茂り、様々な生き物に利用されている。増水で倒されても遅しく成長を続ける。

アブラチャン



早春の林で、木々が葉を出す前に黄色い花を咲かせ、境川に春を告げる。茶花としても使われ、晩秋の黄葉も美しい。種子や樹皮に油を多く含み、灯火に用いられこの名がある。

コクサギ



川沿いのケヤキ林の林床などに生える低木。葉は左右交互に2枚ずつつく。ミカンの仲間で強い臭いがありこの名があるが、好き嫌いは人による。オナガアゲハの食樹となっている。

外来生物

地域の外から人によって持ち込まれた生物を外来生物といいます。外来生物は時として、在来の生物との生存競争で優位に立ち、生態系のバランスを崩してしまいます。また、近縁の在来種と交雑して雑種をつくるなど、種の多様性を脅かす存在となります。このようなことから2005年に施行された外来生物法では、在来の生態系や農林漁業に対して特に悪い影響を及ぼしたり、人に危害を加える可能性のある外来種を、特定外来生物に指定しています。特定外来生物は許可なく栽培や飼育をしたり、運搬、

輸入、野外へ放す、種子をまくなどの行為が禁止されています。

しかし、特定外来生物に指定されているのは、特に影響が大きいごく一部の種にすぎません。ペットショップの動物や園芸用のタネなども外来生物です。自然の中に出れば、多少なりとも同じような問題を引き起こします。これらの生物を自然の川や樹林地などに放したり、植えたりすることはやめましょう。外来生物の問題の原因は、あくまでも人間の行いにあることを、心に留めておくことが大切です。

ヒメダカ



観賞用に品種改良された種。川にも人が放流したのが見られるが、在来の黒メダカと混ざり、昔から住む川の環境に適した遺伝的情報に影響が出ることが知られる。

アメリカザリガニ



北米原産。ウシガエルの餌として持ち込まれた。体色は赤や褐色。固有種のザリガニ(ニホンザリガニ)は北日本・北海道に分布する貴重種で、神奈川県には生息していない。

コモチカワツボ



ニュージーランド原産。マス類等の輸入に混じり持ち込まれた4～5mmの巻貝。マスやウナギに食べられても生きのまま排出される。大量発生し1m²に2万個をこえることもある。

アオマツムシ



樹上性で緑色をしたコオロギ類。8月下旬頃から大きな声で鳴き、在来の虫の声を圧倒する。境川では全域に生息する。中国原産といわれているが明確でない。

ミシシッピーアカミミガメ



米国原産。側頭部の赤い線が目立つ。幼体は緑色をしておりミドリガメと呼ばれている。境川では冬を除いて年中見られるため、河川内もしくは川沿いで繁殖しているものと思われる。

ウシガエル



米国原産で食用として持ち込まれた大型のカエル。境川では一部で生息している。動くものは何でも食べ、水辺の生態系を危機に陥れているため、特定外来生物に指定されている。

ガビチョウ



藪の中に住む茶色い鳥。中国から東南アジア北部原産で特定外来生物に指定されている。一年を通して大きな声でさえずる。ここ10年ほどで急速に分布を拡大した。

ワカケホンセイインコ



華やかな色をした大型のインコ類。ペットとして飼われていたものが野生化した。都内に大規模な集団ねぐらを持つが、大木の樹洞で営巣するため、アオバズクとの競合が懸念される。

オオフサモ



南米原産の水草で鑑賞用に持ち込まれた。水面を覆って在来の水草を圧迫する特定外来生物。ほかにもカナダモなど観賞魚の飼育に伴って持ち込まれた外来の水草が問題となっている。

アレチウリ



北米原産のつる植物。一面につるをはわせ他の植物を覆い尽くし、果実はトゲを持つ。日の良く当たる場所を好み、川原や河川通路、林縁や農耕地の周囲でも見られる。特定外来生物。

行ってみよう！

宝沢・大地沢



宝 沢

大地沢青少年センター入口のバス停あたりで、境川は本沢と大地沢に分かれ、大地沢が都県境となっています。バス停からセンターに向う道沿いや、センター手前を左に入る宝沢では四季折々の動植物が観察できます。第二駐車場から先が大地沢青少年センターとなり、鉄筋の本館やキャビン、屋外炊飯場もあります。また本館に向う左手の崖では「小仏層」と呼ばれる古い地

層が観察できます。本館から源流までは約20分、流域最高峰の草戸山までは40分程かかります。



大地沢青少年センター（キャビン）



境川源流付近

小松・穴川谷戸

城山町には境川の支流の小松川と穴川が流れ、谷戸の風景と里山の暮らしが息づいています。1月14日のセーノカミ（どんど焼き）ではホオノキを芯にした大きなやぐらに火がつけられ、この芯木が燃え落ちて倒れた方向で豊作を占うとか。また今では珍しい炭焼きも里山の冬の風物詩です。数年前からは谷戸の棚田がよみがえり、里山の生き物の宝庫となっ



谷戸の棚田

ています。しかし動植物の採集は厳禁です。畦や農作物を踏み荒らさないよう注意しましょう。



炭焼きの煙



セーノカミ

古淵1丁目市民緑地

JR古淵駅から境川に向かって坂を下り、鹿島神社や旧家の鬱蒼とした屋敷林の中を上流うっそうに向かうと古淵1丁目市民緑地に出ます。ケヤキやシラカシからなる斜面林のほか、一部は竹林、梅林として管理されており、毎年自然体験会が行なわれます。林内の散策路ではニリンソウ・ハグロソウなどが観察でき、様々な野鳥の声も聞こえます。地権者さんとの契約

で保全されている緑地なので、タケノコや梅の実の無断採集はご遠慮ください。



体験会



市民緑地入口



落葉掻き

古淵鵜野森公園・境川森野ふるさとの森

町田駅から境川沿いを20分ほど上流に向かうと、島橋の先に古淵鵜野森公園と境川森野ふるさとの森が広がります。古淵鵜野森公園からは川に下りられ、魚取りや川遊びができ、兩岸の林内では様々な春植物を観察できます。また古淵鵜野森公園の中には、相模原台地を形作った10万年間の火山灰が観察できる露頭があり、崖上には相模野の雑木林が残り、トイレもあります。車でのアクセスは国道16号の「市営プール入口」の信号を曲がって下さい。



火山灰の露頭



魚取り



観察会

源流域 ハイキングマップ

源流コース=大地沢周回コース(所要時間 約90分)

草戸山と大地沢の源流を目指します。都県境の尾根ではカエデなどの広葉樹も見られます。一部に急な登りと下りがあります。



分水嶺コース=城山湖周回コース(所要時間 約120分)

草戸山から続く尾根道は多摩川(西側)、相模川(南側)との分水嶺です。登山道はよく整備されていますが、数カ所に急な登り下りがあります。



連絡先

大地沢青少年センター	042-782-3800
城山観光協会	042-783-8065
神奈川中央交通西 津久井営業所	042-784-0661

-  バス停
-  駐車場
-  トイレ
-  コンビニ

城山自然ふれあい水路

炭焼小屋

ヨゴレネコノメ
ナガバノスミレサイシン
ヤマルリソウ

ゲンジボタル
カワトンボ

穴川

参道入口

ヒノキの美林

小松城跡

城山自然の家

小松川

里山コース=穴川金刀比羅コース (所要時間 約100分)
 穴川沿いには里山の自然と風景が残り、金刀比羅参道はなだらかな尾根道です。
 一番歩きやすいコースですが、私有地や農地への立入りは慎みましょう。

【参考文献】

- 「境川流域図」1990年 神奈川県
「相模原市立博物館 常設展示解説書」1996年 相模原市立博物館
「発掘された町田の遺跡」2005年 町田市教育委員会社会教育課
「境川流域民俗調査報告書」2006年 町田市立博物館・相模原市立博物館
「境川流域浸水実績図」1981年 境川流域総合治水対策協議会
「相模原市史 現代図録編」2004年 相模原市市史編さん室
「境川斜面緑地 動植物総合調査報告書」第1集～第3集 1995年, 1997年, 2000年
境川の斜面緑地を守る会
「境川流域自然環境調査報告書」2008年 相模原市水みどり環境課
「相模原市史 自然編」2009年 相模原市市史編さん室
「大和市史 別編自然」1996年 大和市
「神奈川県植物誌2001」 神奈川県立生命の星・地球博物館
「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」 神奈川県立生命の星・地球博物館
「東京都の保護上重要な野生生物種」1998年 東京都環境保全局自然保護部
「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」2000年～2005年
財団法人自然環境研究センター
「城山町エコミュージアムのみちⅠ・Ⅴ」2009年 相模原市教育委員会城山教育課

(敬称略・50音順)

- | | |
|------|--|
| 資料提供 | 神奈川県・相模原市・町田市・大和市 |
| 写真 | 秋山幸也・太田浄子・加藤高文・河本雅人・佐山裕史・荘司たか志・須永三紀夫・高橋覚・濱田彰・平本修・守屋博文・山本俊介 |
| 執筆 | 秋山幸也・太田浄子・河尻清和・河本雅人・荘司たか志・山本俊介 |
| 執筆協力 | 守屋博文 |
| イラスト | 栗飯原一郎 |
| 作図 | 河尻清和・河本雅人・小林敬幸 |
| デザイン | 小林敬幸 |
| 編集委員 | 宇賀美津子・太田浄子・小林敬幸・荘司たか志・高橋覚・濱田彰・山本俊介 |
| 事務局 | 太田浄子・藤原幸代・多良幸人・平田真之介 |

【問合せ先】

(河川について)

神奈川県津久井治水センター 042-784-1111

東京都南多摩東部建設事務所 042-720-8628

(自然・歴史について)

相模原市立博物館 042-750-8030

町田市立博物館 042-726-1531

(公園・緑地について)

相模原市水みどり環境課・公園課 042-754-1111

町田市公園緑地課 042-722-3111

大和市みどり公園課 046-263-1111

(レクリエーション・観光について)

大地沢青少年センター 042-782-3800

城山観光協会 042-783-8065



この冊子は、
相模原市水みどり環境課とNPO法人境川の斜面緑地を守る会の
協働事業として作成されました。

発行日 平成22年3月
第3刷発行 令和元年9月
発行 相模原市水みどり環境課 電話 042-754-1111
〒252-5277 相模原市中央区中央2-11-15
NPO法人境川の斜面緑地を守る会 電話 042-743-8080
〒252-0303 相模原市南区相模大野5-25-36
ホームページ sakaigawa.eco.coocan.jp/